

## 40 大豆三粒の金仏

伝承地：南大通り1-8-19（善願寺）

話者：16・30

参考書籍：1・4・6・9・11  
19～22・24・27・28



（大豆三粒の金仏）

田川にかかる洗橋の北東に位置する善願寺に高さ約3.6mの銅製の金仏がある。

この大仏は享保20年（1725）に造られたものであるが、造られるいきさつについては次のような逸話があり、「大豆三粒の金仏」として昔から人々に親しまれてきた仏様である。

なお、この大仏（銅造虚舎那仏坐像）は宇都宮市の文化財に指定されている。

江戸時代の八代将軍吉宗のころ、善願寺住職中興第12世栄鋤和尚は大仏建立を思い立って弟子の貫栄とともに諸国を托鉢してまわり、浄財を集めましたが、思うように集まらず、徒らに歳月が流れました。

ある冬の夜のこと、旅の僧が現われて、一夜の宿を乞うのでした。栄鋤和尚は喜んで招き入れ、夜食をともにしながら、大仏建立の念願を

打ち明けました。すると旅の僧は、「私は諸国遍歴の身で、何らお役に立つことは出来ませんが、ここに大豆が三粒ありますから喜捨いたしましょう。」と言うのでした。住職が当惑していると、旅僧は、「この三粒の大豆を境内にまかれたら、来年は百粒程の大豆がとれるでしょう。これを信者に一粒ずつわけ、それからとれる大豆はすべて、寺に喜捨していただく。その大豆をまた多くの信者にやって、実った大豆は寺に喜捨していただく。このようにして十数年をすぎたなら、その大豆の収益は驚くばかりになるでしょう。」と付け加えました。栄鋤和尚は顔をほころばせて「いかにも仰せの通りです。なぜこれに気づかなかったのか……。」

と合掌し感謝しました。旅僧を泊めたのも仏の導きかと心に感じ、早速この言葉を実行に移しました。それから毎年毎年熱心に農家を巡って趣旨を説き、信者を増やしながら大豆の生産に協力していただくことを頼んで歩きました。そして10年の後、このような大仏が建立されたのです。

この年、栄鋤和尚は60歳、弟子貫栄は36歳、師弟が一致して大仏建立に尽力した美事はたちまち民衆の話題となり、誰が詠んだかわからないが、

土や石 積もれば富士の 山となる  
豆も仏と なるどこそきけ、

という和歌が人々の教訓として伝えられるようになりました。

